

# 水田牧草栽培

## その効果と実際例

酪農の盛んな水田地帯では、稲作の跡地に飼料作物を作る傾向が強くなってきたが、裏作期間中しか栽培できないという制約があるため、一年を通じて自給飼料を確保するところまでは手が届かず、相当量高い飼料を買わねばならないことは依然悩みのタネ、ところが田畑輪換を行つて飼料作物を取入れると水稲も増収になることがわかつてきたため、最近、水田地帯の酪農家の間にも稲と牧草で田畑輪換を行う人がふえてきた。以下水田牧草栽培の効果や実際例をながめてみよう。

## 飼料自給化の道開く……

### 地力を高め水稲も増収

田畑輪換栽培そのものはかなり昔から行われており、土壌改良や地力保全などの利点のほかに、都市近郊の農家では換金作物を作り、耕地面積の広い農家では労力をうまく配分するうえで効果があるとされている。そのうえ最近の栽培試験によつて輪換畑に牧草を作つてから水田に還元すると水稲の収量がふえることが明らかになった。

二、三の試験例を紹介してみると――

▽北海道農試の試験―同農試上川支場で輪換畑にレッドクローバー、オーチャードグラス、チモシーなどを四年間栽培した後、水稲を作つたところ、一年目には一〇㍗(反)当り四七〇キ(三・一石)～五二〇キ(三・五石)の収穫(玄米)があり、水稲を連作

していた水田(一〇㍗当り二九〇キ)にくらべ六四～八二%の増収になった。二年目からはそれほど増収しなかつたが、それでも連作水田より二年目が二九～四三%三年目でも二〇～二七%とそれぞれ収穫が多かつた。

なお牧草の種類からみると、レッドクローバーを栽培した跡地の成績がもつともすぐれている。

▽関東東山農試の試験―輪換水田の生産力ももつとも高いのは、三年間畑地にして牧草を作つた後、水田に戻すと、一年目の水稲栽培では無肥区でも一〇㍗当り四八〇キ(三・二石)の収穫、施肥区なら五七〇キ(三・八石)の収量をあげ、連作水田の反収

(四二〇～四四〇キ)を大幅に上回つた。  
▽福島種畜牧場の試験―西白河郡西郷村の輪換畑(火山灰系の腐植土)で満三年間、青刈飼料作物と牧草を混播したのち、水田に戻して農林二十一号を栽培したところ、五一〇キ(三・四石)の反収があり、連作水田の反収(三九〇キ)を大きく引離した。

このように輪換畑の牧草栽培は飼料自給化への道を開くだけでなく、還元田の地力を高めることがはつきりしたため次にあげるように水田に牧草を栽培する酪農家が各所にふえてきている。

〔石川県の場合〕二十九年から田畑輪換に手をつけ、伸長力の強いラデノクローバーの出現以来、輪換畑に牧草を作る酪農家が急激にふえた。最初は「値段の保障されている米をやめて水田にわざわざ草を作るのは愚の骨頂」という非難の声も強かつたが、水田の土壌改良に役立つことがわかつてきたため、いまでは野々市町、鶴米町、鳥越町、尾口町、松住町など約八〇%の水田に広まつている。ここで行つている輪換方法は、各目の水田の一部を約三年間畑地に転換し、その間クローバーのような豆科の牧草を作つてから水田に還元、これを順次計画的に全部の水田におよぼそうというもの。

県が本年二月田畑輪換を行つている農家十数戸を対象に経営状況を調べたところ共通して次のような経営の推移が認められた。

① 乳牛の頭数が増し、田畑輪換と裏作で飼料作物を積極的に作つている。  
② 水稲の総収入は作付面積が減少したにもかかわらずいずれもふえている。

③ 正確にはつかめないが牛乳の自家飲用により、自家消費の米が減つているようである。  
④ 購入肥料はふえる傾向にあるが、これは飼料作物の作付面積がふえたため水稲に対する施肥量は一般農家にくらべいじり少くない。  
⑤ 購入飼料費もふえているが、乳牛の頭数増や育成牛が乳を出すようになったことなど……によることがわかつた。

〔広島県砂谷村の場合〕農林省にはいつた報告によるとラデノクローバーを導入して次のような田畑輪換を行つている。抽出農家一〇戸当りの平均では水田五二㍗のうち三㍗を転換地としこのうちラデノクローバーは約八㍗で年間六～七回刈で一〇㍗当り一八・七五～三〇㍗の収量をあげている。稲刈のち種まきし、普通四年利用だが、草生が悪ければ、二年くらいで水田に戻しているという。

